

## 国文学（近現代）

浦西 和彦

新制大学の設置が認可され、昭和二十三年四月に関西大学文学部国文学科が開設された。関西大学国文学会の「国文学」は昭和二十五年五月十日に創刊された。新制大学になった二年後である。「国文学」創刊当時の専任教授は、吉永登、飯田正一、金子又兵衛の三教授と員外教授として澤瀉久孝である。「国文学」

第一号の「編集後記」には、「戦争中の国文学は、偏狭な軍国主義と結びつくことによつて、みずからの權威を放棄した。戦後の国文学は、例えば歴史学などの花々しい立上りにも拘らず、どうにもならない虚脱状態を続けるばかりで、依然空白を加えていた。しかし、近頃になつて、国文学界にも、ようやく新しい氣運が動いてきたようである。人々の、真摯な反省や烈しい苦悶の呼吸づかいが、身近に聞えてくるのである。そうした時に、われわれは、手を拱いたままじつとしてはいられない。いや、われわれは、内側から駆り立てられる要求に、居ても立つてもいられない程の焦燥を感じているのである」とある。

「国文学」における近代文学の最初の論文は、当時講師を勤め

ていた榊原美文の「『海潮音』の役割」（昭和二十六年二月十日、第三号）である。上田敏の訳詩集『海潮音』が詩壇に与えた影響について論じている。その影響を受けた明治新体詩の最高の完成となった蒲原有明の『有明集』は、「芸術的手法の上だけの象徴詩」であつて、「美しい造花のような詩」であつた。それは当時の日本にはフランス象徴詩を移植生育させるに足る社会的現実的地盤がなかったからであるという。安易に何事も社会や時代の原因があるとするのは、この時代の風潮であろうか。

先の「編集後記」に「学界の公器として広く一般に開放する」とあり、第四号には早稲田大学の稲垣達郎の「『安井夫人』ノート」（昭和二十六年六月十日）を掲載している。森鷗外の歴史小説を論じた論文で、「安井夫人」には年代や年号を明記されていない。「年齢だけをもつて終始」したところに特殊な意味をみる。稲垣達郎は「これを歴史離れにからまるひとつの方法と考へ、鷗外はそこに小説を意識」した。「安井夫人」は歴史其儘であると共に、歴史離れをこころみ、全体を小説として納得させたのだという。「安井夫人」に於ける歴史離れと歴史其儘の両者の関係が混沌としていることを論じた。

第七号には、谷沢永一の「斎藤茂吉の作歌の態度」（昭和二十七年六月三十日）がある。その「編集後記」に「谷沢永一氏の

「斎藤茂吉の作歌の態度」は、卒業論文の副論文として提出されたものである。茂吉の文学精神を考える上に、重要な問題を扱っていると思う。文学というものに、ひたむきな熱情を傾けようとしている若い学徒の論として、御精説を得たい」とある。当時の左翼公式主義論に迎合しないで、茂吉の断片的な歌論のその内面的な組み立てを読み取る。作品以外の資料を持ちこまないで、あくまでも作品の本文に書かれている記述だけに論拠を求める谷沢永一の研究方法論が、既に確立していた。谷沢永一は「国文学」に十五の論文と文献目録、書評などを載せている。

興津要「仮名垣魯文——作家的展望——」（昭和三十年二月二十日、第十三号）は、仮名垣魯文の習作期、生長期の近世末期までを中心に、魯文が瓦版や流行端唄の作者にとどまることなく、「際物師」という武器を持った戯作者としての生長をみせる経過を詳細に描く。興津要著『転換期の文学』に収録。

山下澄子は、「柳田国男の「学問」について」（昭和三十七年六月二十日、第三十三号）、「石川淳試論」（昭和三十八年六月二十日、三十四号）、「折口信夫の内的発想」（昭和四十年十二月二十日、第三十九号）の三編の重厚な論文を書いている。折口信夫論では、折口短歌に於ける「内律世界」を見る。「日本文学の

発生序説」を中心に折口の学問分野に於ける独自性を追究する。

玉井敬之は、「草枕」の一面（昭和三十九年六月二十日、第三十六号）と「文芸教育論」の史的位置（昭和四十二年十二月二十日、第四十二号）の二編を寄稿している。前者の「草枕」論では、「二百十日」に漱石の「草枕」的世界の否定、非人情への転換をみることは無理がある。漱石は草平の手紙に強い衝撃を受け、草平の手紙こそ、「野分」への道を開拓し、「回心」の一因をなすものがひそんでいたと推論する。後者は大正中期に文芸教育論者として再生することができた片上伸の『文芸教育論』（大正十一年九月、文教書院）について史的考察である。

書誌学者の天野敬太郎が、「石川啄木作品の外国語訳について」（昭和三十九年六月二十日、第三十六号）、「芥川龍之介書誌案内」（芥川龍之介作品の外国語訳について）（昭和四十年七月二十日、第三十八号）、「萩原朔太郎作品の外国語訳について」（昭和四十年十二月二十日、第三十九号）を載せているのも書誌を重要視する「国文学」の特徴であろう。

「特集・芥川龍之介」（昭和四十年七月二十日、第三十八号）と「明治文化研究会事歴 田熊清津子編」特集（昭和四十一年十月二十日、第四十号）の全ページを費やしての二つの特集を刊行しているのは特記していいであろう。資料的意義の大きな

特集であり、学会誌であるからこそ可能であった特集で、特に後者は商業雑誌では出来ない企画であろう。

浦西和彦は主に葉山嘉樹や徳永直等のプロレタリア文学の論文を発表する。「『煤煙』論の前提」や「宮本百合子全集逸文について」は文壇で小島信夫や中野重治等が取り上げた。

奥村透「開高健の文体」（昭和六十三年一月三十日、第六十四号）は、開高健作品の文末表現（「うけ部」）における「せられる」「させられる」と「しかない」の頻出を分析した注視するべき論文であった。

増田周子は宇野浩二や火野葦平の研究をすすめ、論文「宇野浩二『苦の世界』書誌的周辺」（平成六年六月二十日、第七十一号）等の論文や多くの宇野浩二の未発表書簡を発掘し、論文集『宇野浩二文学の書誌的研究』（平成十二年六月二十日、和泉書院）、編著『宇野浩二書簡集』（同上）を刊行した。

荒井真理亜は「上司小剣『鱧の皮』論」（平成十三年三月十七日、第八十二号）等を発表し、『上司小剣文学研究』（平成十七年十月二十五日、和泉書院）を出版した。小剣以外にも久米正雄、宇野千代の論文を書いている。

田中葵「『沈黙』論——草稿の発見を踏まえて——」（同上）は、積極的に信者を弾圧する側になった井上筑後守の精神構造を問

題にした好論文。

黄泰模「玄月の『陰の棲みか』論」（同上）は、『陰の棲みか』における「欲望と暴力」を論じる。

鄒双双は「佐佐木信綱の中国漫遊」（平成二十一年三月十日、第九十三号）等、北京で戦時中に「万葉集」など日本文学の翻訳を続けた銭稻孫と佐佐木信綱や吉川幸次郎ら日本文化人たちの交流を明らかにした異色の優れた研究を発表し、『文化漢奸』と呼ばれた男——万葉集を訳した銭稻孫の生涯——」（平成二十六年四月三十日、東方書店）を発行する。

岩田陽子の津村節子「海鳴」論、福森祐一の沖野岩三郎『宿命』論、西村峰龍の川端康成『寒風』論、平田恵美子の「広津柳浪」『黒蜥蜴』論、森瑠偉の「司馬遼太郎」『俄——浪華遊俠伝——』と堺事件」など若い人の好論文が多くある。

（うらにし かずひこ／本学名誉教授）